

## 『人工呼吸器使用者の自立生活を実現するために』から10年

『生きていく』監督 神吉 良輔

「人工呼吸器つけてて、競艇好きで酒好きのおモロイ男がおって、競艇場で酒呑みながら『行けー!!!』って叫んでるような彼の紹介映像をつくってくれへんかな？」

「なあ、池田さん！ かまへんやろ？」。

2007年の3月ごろだったか、6月に明石で開かれる『人工呼吸器使用者の自立生活を実現するために』シンポジウムの打ち合わせの席で、はじめて会う映像制作者の僕に、主催者である兵庫県頸髄損傷者連絡会の三戸呂会長と宮野事務局長が笑いながら、僕の向かい側で2人のヘルパーを従えてドッカーリと大きな電動車いすに座る池田英樹さん（当時33歳）をこう紹介してくれました。そのときの英樹さんは大きな目玉をグルグルさせながら、戸惑っていたのを覚えています。

英樹さんは、27歳のときに交通事故で頸髄を損傷し、首から下がマヒして人工呼吸器ユーザーとなり、兵庫県尼崎市でご両親とともにヘルパーサービスを利用して生活されていました。

人工呼吸器を使う人と接したことがなかった僕は不安でいっぱいのままカメラを持って、桜の名所である滋賀県の海津大崎へ花見に行く英樹さんについて行きました。

でも、大きな不安を感じていたのは最初のうちだけで、ヘルパーに指示しながら咲き誇る桜の写真を撮る英樹さんの様子や琵琶湖湖畔の桜並木を一望できる所で食事する様子を撮ったりしていくうちに、楽しい気分になっていました。

そして、それから英樹さんの日常生活に少しずつ密着させてもらいながら、Barで酔いつぶれる姿やカラオケで熱唱する姿、競艇場で一喜一憂する姿（実際の英樹さんは、競艇場で叫ぶ人ではなかった）、なども撮影させてもらいました。

シンポジウムで流すための映像制作が終わった後も、僕らはちょくちょく会ってボーリングをしたり、お酒を呑んだり、カラオケに行きました。同じ年で、お互いに呑み食い好きの野球好き（僕がタイガースファンで英樹さんはカープファン）

だったことも僕らの友情を育んでいった要因だったと思います。

そんなある日、彼が両親を誘って夏の北海道周遊旅行がしたいと話してくれました。ケガで呼吸器ユーザーになる前に何度も旅して感じた北海道の素晴らしさを、高齢になった両親にも味わってもらいたいというのが大きな目的でした。

英樹さんが計画した旅程は9日間と長期で、しかも、当時は普段から利用しているヘルパーが利用できないという制約もありました。いろいろと準備に苦勞をしている彼を見ながら、僕は英樹さんのことを撮影するかどうか悩みました。

そんなときに、シンポジウムでの映像を制作した際、「池田英樹さんのように考えて行動できる呼吸器ユーザーは、なかなかいないですよ」という宮野さんの言葉を思い出して、「彼のこの試みをきちんと映像に残して、外へ出ることが困難な呼吸器ユーザーの力になるものをつくりたい」と思い、自主制作することにしました。

このことについては、2010年に『生きていく』という映像作品にしましたので、ご存知の方もいらっしゃると思います。

結局、この作品では、英樹さんの生きていく力の源とそれが意図せず、つながりのある他の呼吸器ユーザーの方々に波紋が広がっていく様子を見つめた作品となりました。



《愛知県で暮らす杉田さんに会う池田英樹》

英樹さんには NHK 『のど自慢』 の本選に出るといふ夢がありました。そのために何度も予選に出てチャレンジしていました。

全国放送されるためには、この予選を突破しないといけないのですが、本番では緊張してしまい、それまで練習したカラオケの演奏とはまったく違う生バンドの演奏に圧倒されて、歌い出せずに終わるといふ苦い経験もされていました。

そんな英樹さんには、別の目標もありました。彼のいろんな経験が呼吸器ユーザーとなって間もない方の力になるのではと考えた医師の土岐明子さんは英樹さんに新たな呼吸器ユーザーの方たちを紹介しました。英樹さんは、紹介された方たちと面会の機会を重ねていくうちに、ただ雑談するだけでなく、しっかりとしたカウンセリングの知識をもって接することが、その人たちのためになると考えるようになりました。

そこで、英樹さんはそのための専門学校を自分で探して通い始めました。呼吸器をつけた車いす利用者の生徒は、彼がはじめてだったそうです。

英樹さん自身、なかなか生きがいが見つからずに悶々としていると話してくれたことがあるのですが、自分を役立てることができる目標を見つけたことは本当に嬉しいことだったと思います。

しかし、英樹さんはカウンセラーの資格取得や『のど自慢』の本選出場といふ夢を実現することなく、2013年7月に39歳で昇天されました。



《海津大崎での池田英樹さん》

年月が経った今でも彼のことを伝える映像作品『生きていく』を必要としてくれる問い合わせがあります。つい先日も、北海道の図書館から活用させてほしいという連絡がありました。また、英樹さんが生前使用していた人工呼吸器を扱うキンキ酸器さんが、役立ててくれそうな病院へ『生きていく』を寄贈してくださり、いろいろな方に活用してもらっています。

嬉しかった記憶としてあるのは、英樹さん亡き後の上映会で、普段なかなか外出できずにしんどい思いをされている呼吸器ユーザーの方が頑張ってきてくださり、自分のことを大勢の人の前で話してくれました。

英樹さんもケガをした直後は、外出できるようになるまで苦しい思いをされていました。

そんな英樹さんが兵庫頸髄損傷者連絡会の人たちと出会い、外に出る力をもらったとおっしゃっています。

『生きていく』の中で英樹さんに刺激を受けた呼吸器ユーザーとして出演してくださった米田さんは、英樹さんから受けた前向きな力を「今度は自分の番として、他の人にも声をかけていきたい」と語ってくださっています。この生きる力の連鎖が僕も含めてつながり、広がっていると信じたいです。

『来月てんぷらでも食べに行きましょう』というのが、僕に話した英樹さんの最後の言葉でした。

もし英樹さんが生きていたら、今でもきっと、こんな風に声をかけてくれて、お酒を飲みながら強くなったカープの自慢話をされて僕は悔しがったりしていると思います。そしてカラオケでは英樹さん得意の『ルパン三世』と一緒に熱唱して、日々のモヤモヤやストレスを発散したりしているでしょう。

でも、調子に乗って日本酒とビールのちゃんぼんで意識を失うのだけは、勘弁してほしいけどね。笑

#### 【参考映像】

『生きていく』ダイジェスト（3分37秒）

[https://youtu.be/NbN\\_L\\_iG86w](https://youtu.be/NbN_L_iG86w)